

## 『和紙研究』解説

京都工芸繊維大学非常勤講師 紙漉き師 田村 正

### 『和紙研究』の発刊

『和紙研究』が発刊に到った経緯を調査するため編集後記を読み解いていくと、そこには意外なことが書かれていた。

せつかく芽ばえた和紙談叢が廃刊となり、新たに同種類の和紙研究が発行せらるゝことゝなつたに就いて、傍観者の位置にある人々としては、如何にも不審に思はれることであらうから、その実際の事情に就て大略申上げて置く方がよからうと思ふ。実は数年来少数の同好者が和紙に関する意見を交換する様なこともあつて、専門の雑誌でもあつてよからうと考へてゐた。所が印刷の業務にも多少の関連を持つてゐる奥本正人君よりの懇望で、同君と若林書店とが雑誌発行の業務を引受けることゝなり、同人が会合して題号や体裁を定め、第一号を発行するに至つたのが和紙談叢である。〔後略〕（禾人生）

（『和紙研究 第一号』「編集雑記」、昭和14年1月10日）

創刊を祝うべき第一号の編集後記が反省文のような趣旨になっていることに、いささか疑問に思い、その経緯を調べた。『和紙研究』が生まれるきっかけが昭和12年発行の『和紙談叢』であることが分かり、編集後記からその辺りの出来事を読み解いてみた。

和紙に就ての研究雑誌を作つて見たいと予てから思つてゐたが其の研究や調査は到底私どもの及ぶことでないと諦めてゐたが、昨年の暑休中、禿氏先生をお訪ねしてこの話をしましたところ、即座に御賛成下さつたので、壽岳先生、新村先生、中村先生などをお訪ねして御協力をお願いしましたところ、皆々様が進んで御協力下さる事を御約束下さつたので、大いに力を得て、具体案を練り、三年十二冊を以て大体和紙の輪郭を終り、又現産地の大略を紹介しようと云ふ考へで、若林君と自分が直接事務に当る事として、和紙研究会の名のもとに紙に関する諸方面の仕事に及ぶ限り進めて行く事を誓つたのである

先づ第一声として昭和年十月二十四日京都帝大楽友会館に於て、「紙に関する座談会」を開いた。お集り下さつた方々は、新村、禿氏、壽岳、大澤、日下の諸先生の外に三高のパーキンズ氏、表具屋さんの山川、吉村氏などで、三時間に亘つて色々と参考になるお話

があつたので、本誌に載すべく速記したのであるが、頁数の都合で割愛の止むなきに到つた。其の時寿岳先生の発案によって誌名を「和紙談叢」と命名することになった。〔後略〕

（『和紙談叢 第一冊』「雑録 和紙研究会発会」、昭和12年2月10日）

『和紙談叢』の発行は、発案者である奥本正人が昭和11年夏に仏教学者であり浄土真宗本願寺派の僧、禿氏祐祥を訪ねることに始まる。「研究調査は私どもの及ぶことでない」と言い切り、私どもの「ども」は若林君であると明かし、二人三脚で事務方を務めると表明した。「若林君」とは、京都市伏見区京町南八丁目を住所とした若林春和堂店主、若林正治である。禿氏祐祥の後に続いて、新村出より先に年若い寿岳文章の名前が挙がっているため、列挙の順序は相談した順なのか、あるいは五十音順の可能性もある。座談会参加者の紹介は、お歴々優先の配慮もあつたと考えるのであるなら、ここはやはり先に友人に相談できた奥本正人の年齢は四十代と推測した。

『和紙談叢』会員募集要項を次のように掲載している。

季刊「和紙談叢」会員募集

- 一、発行 年四回、三ヵ年十二冊を以て完了
  - 一、内容 紙(新古東西)に関する研究、趣味、各産地紙紹介等
  - 一、用紙 本文、表紙共手漉和紙
  - 一、口絵 数葉、各産地の特色ある標本紙添付
  - 一、形態 大形菊判(八寸×五寸七分)約百頁
  - 一、部数 番号入限定、全十二冊同一番号贈呈(申込順)
  - 一、会費 一ヶ年金六円、半ヶ年三円(前納)
- 申込所 澄心堂 京都伏見京町南八丁目  
振替京都五六〇六番 電話伏見一六六五番

この、『和紙談叢』編集後記の記述と会員募集から、『和紙研究』を位置づけるならば、”昭和11年秋、京都大学楽友会館で開催された「紙に関する座談会」を機に和紙研究会が発足する。研究会には、新村出、藤堂祐範、禿氏祐祥、牧野信之助、上村六郎、大澤忍、寿岳文章の七名が同人として参加した。新古東西の紙に関する研究発表の場として会が発行した『和紙研究』第一号(昭和14年)～第十七号(昭和59年)は、紙、趣味、各産地紙紹介、見本紙標

本解説、和紙研究文献解題などを内容とした昭和を代表する和紙論文の機関誌である”といえよう。なお、この同人七名は、寿岳文章が『和紙研究』第二号において「誰々が会の同人かと訊かれることも多いので、前頁に同人名を記しておいた。」と発表したメンバー順である。

### 奥本正人と『和紙談叢』

繰り返しになるが、『和紙研究』の発行は奥本正人が禿氏祐祥を訪ねたことから始まった。その奥本正人とはいかなる人物であるかを追ってみた。『和紙談叢 第一冊』には、奥本による「美濃國抄紙の沿革と現況」と題した論文が掲載されている。また、「美濃行」と題した編集後記の文中にみられる『美濃紙抄製図』を、若林正治とともに『縮写 美濃紙抄製図説 全』として復刻刊行したことが分かっている。

十二月三日 若林君と二人で第一回的美濃紙の調査に出かけた。先づ岐阜県立図書館に花林主事をお訪ねして、文献資料の探究に懸つたのであるが、充分の成果を挙げる事が出来ず、同市大塚なる人が最近某氏の依頼にて美濃紙関係の調査を創めてみられるとの事で、花林主事より電話して下さったが、まだ何も集つてゐないとの事であつた。次いで県庁の文書課の蔵書目録中に「美濃紙抄圖」なるものを見出してよるこんだのもつかの間で、其の下に「大正十年廃棄」の朱印が押されてゐるのを見ては如何とも仕様がなかつた。この書が岐阜県庁に於て廃棄の運命を見るとは、時の当局者の心情が疑いたくなる。只其の時『美濃紙抄製図』の下図に使用したものと思われる「産業図」なる一冊を拝見する事が出来たので、其の写真複写を花林氏に御依頼して県庁を出た。〔中略〕

十二月五日 大阪の古書即売会に於て岐阜県々庁が廃棄した『美濃紙抄製図説』の写しを若林君が見付けて来たことは第一回美濃行の不成績に引かへて近來の大収穫であつた。何れ縮写を世に送る積りである。

（『和紙談叢 第一冊』、「雑録 美濃行」 昭和12年2月10日）

『縮写 美濃紙抄製図説 全』の編集後記に、奥本正人は以下の記述をした。

『美濃紙抄製図説』は明治十三年、岐阜県勸業課に於て編輯されたものであるが、編者及び挿画の作者は不明である。〔中略〕とにかく、転写本にもせよ精微を尽した点に於て我国紙漉文献として他に類を見ないものであると同時に、当時の美濃地方に於ける抄紙法を知るに此の上もないものと思ふまゝに、一人これを深蔵するに忍びないので、初め和紙

研究会編輯の『和紙談叢』第一冊に収める筈であつたのを別冊として広く世に頒つ事としたのである。本書の原本として使用したものは普通的美濃判よりやや大形(九寸四分×六寸六分)で総紙数八十頁、内緒言及解説十五頁、図六十頁である。〔後略〕

昭和十二丁丑年四月 洛南の寓居にて 奥本正人識

(『縮写 美濃紙抄製図説 全』「跋語」、澄心堂、昭和12年)

[奥付]

昭和12年5月15日印刷

昭和12年5月25日発行 頒賃金壹円貳拾銭 送料6銭

縮写本編輯者 奥本正人 発行者 若林正治

印刷者 笠間信義 製版者 浅田製版所

発行所 澄心堂 京都伏見京町南八丁目

また、『和紙研究 第一号』の編集後記に次のような記述がある。

[中略] 年末になると奥本君の行方が分らない。いよいよ続刊出来ないといふことが判然すると物淋しく感ずる様になつた。吾々同人としても何か間接の責任があるが如く思はれた。延刊の事が話題となつたり、その事情を尋ねられたりすると、家族の者に不都合があつた様な思ひで、答弁にも躊躇する。名義上協力者となつてゐる若林君も次第に責任を感じ、去る七月中旬の頃、奥本君の下宿先を漸くにして探知し、自分を案内して呉れた。その際、奥本君は不都合を陳謝しつつ、第二号の原稿と読者名簿等を差出し一切の処理を託されたのである。その結果としては若林正治君が残務整理に当り、同人の会合を催して再び陣容をととのへ、和紙研究を刊行する事と決定したのである。〔後略〕(禾人生)

(『和紙研究 第一号』「編輯雜記」、昭和14年1月10日)

以上から、奥本正人周辺の足跡を整理すると次のようになる。

昭和11年夏 禿氏祐祥を訪ね、其の後、寿岳文章、新村出、中村直勝など訪問

昭和11年10月24日(土) 京都帝大楽友会館に於いて、「紙に関する座談会」を開催

昭和11年12月3日(木) 若林と二人で第一回的美濃紙の調査

12月5日(土) 若林大阪の古書即売会に於いて『美濃紙抄製図説』購入

12月23日(水) 再び若林と二人で美濃紙の調査

昭和12年2月10日(水) 『和紙談叢』発刊。「美濃国抄紙の沿革と現況」発表

5月25日(火)『縮写 美濃紙抄製図説 全』を『和紙談叢別冊』として編集発行  
其の後奥本行方不明、昭和13年7月半ば『和紙談叢』から身を引く。生年月日不明。

ここで『和紙談叢』の陣容を見てみよう。

題字 新村出、表装用紙 武州小川産、本文用紙 武州小川産、見返用紙 宇和泉貨

和紙外聞抄	新村出
和紙の形状	禿氏祐祥
染紙紀談(一)	上村六郎
更紗紙 加工紙雑考の一	禿氏祐祥
檀紙考	大澤忍
ハンタア氏の『極東紙漉國巡礼』を読む	壽岳文章
美濃紙に関する文献二三	伊藤信
美濃揖斐谷の抄紙	秋山桓士
美濃國抄紙の沿革と現況	奥本正人

「編輯発行印刷所変遷」【資料1】、「『和紙研究第一号』昭和14(1939)年1月発行時同人を取り巻く人の年齢」【資料2】によると、知恩院山内信重院の住職、藤堂祐範が編輯兼発行人兼和紙研究会代表者となり、第一号から第十二号まで和紙研究会の代表者を続けたことがわかる。『和紙研究第一号』に掲載した論文は次の7本であり、京都大学を繋がりとして集まった顔ぶれであることがわかる。

和紙覚書	新村 出
名鹽産紙について	中山 琇静
橘香果の紙譜	大澤忍
染紙紀談(その1)	上村六郎
吉野紙雑考	禿氏祐祥
たむきの語源に就いて	大澤忍
名塩紀行	壽岳文章

## レンブラントと和紙

新村出の「和紙外聞抄」と「和紙覚書」の全文を紹介しておこう。

和紙が海外にもはやされる由来は甚だ古い。漢土にはともかく、欧州に知られたのも、南蛮貿易以来であることは云ふまでもないが、殊に和蘭通商の後和紙は益々その価値を認められる様になり、通交開始から半世紀を経たかと思ふ頃、レンブラントがエツチングやスケッチにいちやく和紙を利用したやうな事実も存する。昭和七年に当る一九三二年の六月にレンブラントの由緒の地アムステルダム大学の三百年記念式が挙行された時、それに参列した私は国立美術館の一室で開かれたレンブラント特別展観にも、和紙に摺写した二三の作品を覧たことがあつた。年記があつたと思ふが、今日録を見えなくしたので、詳説しかねる。慶長元和にわたる十年間の日英貿易の結果からも、和紙が英国への舶載はあつた筈である。南蛮通航時代南欧諸国には、和紙に関する報道は吉利支丹文献では未だ見かけない。即ち元禄時代に阿蘭陀外科医の資格を以て来朝した独逸の学者ケンペルが、日本製紙植物図説ともいふべき重要な調査を発表して著名であつて、爾来これらの所詮蘭医の零細な報道が往々見えるのであるが、西教の伝道報告書には和紙の記事が抜けてゐるかに思はれる。之に反して本邦の西辺における吉利支丹学林の付属印刷所で刊行された羅馬字本は悉く雁皮紙両面摺であつて、文禄の天草版伊曾保物語をはじめ、諸聖伝でも基督模倣でも乃至は文典辞書でも、其の前後の出版物いづれも和紙摺であつた。少なくとも書籍印刷用紙としての和紙が価値を認められたのは、これらの印本の舶載が興かつて力がありはしまいかと考えられる。

西紀一六〇三年即ち慶長八年の頃長崎所刊の日葡辞典を見るに、紙に関する名称は少なくない。カウゾはないが、カヂ又カヂノ樹で造紙することが見はれてをり、アツガミ、アツヤウ、ウスヤウ、ウスガミ、打曇、雁皮、厚紙(こうし)、杉原、修善寺、鳥の子、丈高(たけたか)、中結(なかゆひ)、引合せ、間に合ひ、等々。美濃紙には、美濃の国の紙と註してあるだけであるが、杉原の方には、日本の書簡を書く紙の一種とあり、修善寺には、赤い紙としてある。不思議なことには、奉書の名がなく又檀紙も載つてゐない。

此の日葡辞書より半世紀程古い嘉靖年代の末(西暦一五六〇年代)即ち日本の永禄年代に来朝した明人鄭舜功の日本一鑑と題する風土記の巻二、器用の部には、紙の條の首めに、豊後越前皆有之、按其紙材皆有山桑之皮、其材堅善、非蘭作者、と述べ、鳥子紙には色如鳥卵故云、宿紙には一云紙屋紙薄而黒はよいが次に而公家所用紙出甲斐とある

のは、別條の竄入と見るべきか。軽黄紙を註して佳紙也出幡摩、檀紙は名称のみで註がない。修善寺の條下には一云薄紅紙とあつて出伊豆と註し、杉原には出産紙処故名之と称してあるのみ。美濃紙が落ちてゐるのは意外である。薄様と打曇とは拳がつている。以上出典は考へ得るが一切省く。

昨昭和十一年四月五月六月所刊の歴史地理の諸号には、小野晃嗣氏の「中世に於ける製紙業と紙商業」と題して、和紙の歴史的研究が掲載されてゐる。稀有な大著である。美濃紙の歴史は、四月号の四頁五頁を初め二八乃至三三に亘る数頁に考證してあり、在来の文献例へは有名な梅花無尽蔵など以外、中世幾多の記録を引いて、茲にも重要な研究が載つてゐる。然し和紙の支那への舶載については、従来の考察を除くと、天龍寺の策彦和尚が遣明副使として天文八年（嘉靖十八年）の初渡集に和紙を内外人へ進物に使つた夥しい寛例が散見してゐるのを注意せねばならぬ。山口紙、徳地紙、美濃紙、越の打曇、その他種々の名称が載つてゐる。従つて大内氏が紙を明に渡して書籍に摺らせたといふ伝説の如きも、これらの史実を俟つて或は然らんかと思はしめる。尤も足利義満が応永八年既に明の朝廷に薄様の和紙千帖を贈つた例もあり、更に和紙が唐土に知られた由来の甚だ遠いことは申すまでもない。

（『和紙談叢 第一冊』、新村出「和紙外聞抄」、昭和12年2月）

和紙談叢の拙稿和紙外聞抄のうちに十七世紀における和蘭の巨匠レンブラントが其のエッチングに日本紙を用ゐた事実を指示しておいたのであるが、起稿の時つひ一九三二年（昭和七年）の初夏に自分が覽た時のレンブラント展覧目録を見失つてゐたので、報告が甚だ不完全であつた。今その目録を見出したので、少しばかり補遺を試みたい。

該目録には、日本紙摺と記してあるエッチングが四十点、水彩ペン画が四点、そのほか支那紙摺のものが九点あげられている。姑くエッチングのみについて云ふと、一六三〇年製作のが最も古く、一六五八年のが最も新しい即ち寛永七年から万治元年にわたる二十九年間のもので、作者レンブラント（一六〇六生一六六九没）のエッチング製作の初期より末期に至る多年に及んでゐるのである。展覧の際はむろんガラス越しでもあり、自分が未だ和紙について格段の注意を払わなかつた時分であるから、紙質などについて何等語るべきものがないのは甚だ遺憾である。レンブラントのエッチングに日本紙が使はれたことは、近年日本のエッチングの雑誌に誰かの訳文中に説及ばされてもあつた様な気がする。今憶えてゐない。

（『和紙研究 第一号』、新村出「和紙覚書」、昭和14年1月）

以上からわかるとおり、レンブラントのエッチングに和紙が使われていることを文献で最初に指摘したのは新村出である。しかしながら最後に気になる記述がある。「近年日本のエッチングの雑誌に誰かの訳文中に説及ぼされてもあつた様な気がする。今憶えていない」とあり、昭和 14 年に新村出がこれを書いた以前に、すでに言及されていた「エッチングの雑誌」については調査を続行する必要があるが、手元にある貴田庄著『レンブラントと和紙』のプロローグでは、新村出と寿岳文章を次のように紹介している。

わが国でも、1968 年に「レンブラント名作展」が東京国立博物館と京都国立博物館で、1968 年から 1969 年にかけて「レンブラントとオランダ絵画巨匠展」が東京上野の国立西洋美術館と京都国立博物館で開催されている。

この時の展覧会を見た英文学者であり、和紙の研究者であつた壽岳文章は『和紙の旅時と場所の道』（1973）という著作において、「かれ(レンブラント)が和紙の美しさと特質に心ひかれ、エッチングにスケッチに、いちはやく和紙を使っていることを、最近日本で開催されたレンブラント展で、私はこの自分の目でたしかめた。エッチングだけでも三百点以上にのぼるといわれるかれの作品のうち、用紙の何割がどんな種類の和紙であるかをつきとめる作業は、日本の美術史家に課せられたこれからの興味ある作業であろう」（86 ページ）としたためている。

（貴田庄著『レンブラントと和紙』、八坂書房、2005 年）

貴田庄は、新村出の「昭和七年に当たる一九三二年の六月にレンブラントの由緒の地アムステルダム大学の三百年記念式が挙行された時、それに参列した私は国立美術館の一室で開かれたレンブラント特別展観にも、和紙に摺写した二三の作品を覧たことがあつた」という一文が壽岳文章の記憶の奥底に密かに横たわっていたと考えられると推理し、壽岳もまた 1968 年の京都国立博物館へ勇躍レンブラントの展覧会に赴いたに違いない、と結論付けた。貴田は、この『レンブラントと和紙』を上梓するにいたった心境について、「本書では、壽岳文章がかつて提唱した『日本の美術史家に課せられたこれからの興味ある作業』という言葉に揺り動かされて、レンブラントの銅版画に用いられた和紙について追い求めたことを述べてみたい」と記している。私も貴田と同じように、この度の研究発表「『和紙研究』解説」に取り組もうとしたのは、『和紙研究 第十六号』における壽岳文章の言葉があつたからである。こつこつと読み進め、気に入った論文を紹介、解説できることが幸いした。紙漉き師という立場から見た



『和紙研究』として作者の想いが少し分かった様な気がする。おわりにその寿岳文章の言葉を次に掲げて、この研究発表をまず第一回の「『和紙研究』解説」とする。

#### 「和紙研究の回顧と展望」

寿岳 文章

古都在住の同好者数名が集まり、新村出博士を中心に、和紙研究会を結成してから半世紀近い年月が経過した。その五十年が、長かったとも短かったとも思われるのは、日本歴史始まって以来の曠古の大戦が間にはさまっているからであろう。そして同人の半数以上が不帰の客となった。言わばまわり持ち風に、同人の居宅に集まり、機関誌の編集会議や、持ちよりの和紙談を楽しんだのは、ついこの間のように思われるのに。

会の機関誌『和紙研究』は、名詮自性、純粹に和紙の研究を主要目的とし、それも歴史的分野に目くばりを行き届かせたので、勢い和紙の「過去」がとりあげられることが多かった。しかし現実面では、戦局の苛烈化に伴ない、和紙生産の伝統は、それが残る各地方で分断され、消滅の一手手前まで来ていた。和紙の「未来」のために、この憂うべき「現在」を何とかせねば、との思いは、私の胸を強く打ってやまなかった。和紙へのそうした政策的顧慮が、私の場合、何号か和紙特集号を出した日本民芸協会の月刊誌『工芸』に托される。

戦争は終り、平和がもどってきた。原爆被災というひどい目にあった日本は、当然のコースとして、平和産業に徹した復興の道を歩むであろうとの期待が、内外の有識者の間に大きかったにかかわらず、池田勇人以来、戦後歴代の為政者は、高度経済成長を国是とし、資源が国内に無いにもかかわらず、日本を世界の一大工業国化し、あれよあれよと言う間に、自然環境破壊の一大モデル国に仕立てあげてしまった。戦後の復興を私たちが心から願っていた平和産業の一つ、和紙抄造なども、復興はおろか、根も葉もなくなるほど烈しく吹き飛ばされてしまった、と見るのが正しいとらえ方であろう。その元凶たちは、周知の通り、いま裁判所の門を出たりはいったりしている。

こうした現状をまのあたりにしては、復刊した『和紙研究』も、純粹に研究の分野だけを守っておればよいというわけにゆくまい、というのが私の感想である。文化の本質などまるで考えたことのない浅はかな為政者の、狂暴な政策のあおりを食って、まさに風前のともしびの運命にある和紙文化の担い手の主役、すなわち各地に残存する抄紙家

たちや、抄紙用具の製作者たちと血の通う連絡をとり、和紙文化の伝統を根絶やさぬ方法を講ずることも亦、いやそのことの方こそが、これからの『和紙研究』同人に課せられた大切な宿題のような気がする。老いて病む今の私に、往年の気力は求めらるべくもないが、私の気概を汲んでくれる後続の和紙研究文化顕彰者たちや、その人たちと気脈を通ずる若い世代の和紙抄造者がいることに、私は和紙の未来への望みをかけている。これからは量でなく、質で勝負するよりほかはあるまい。

(『和紙研究 第十六号』、昭和 54 年 12 月)

(附記) 『和紙研究』に発表された論文を十七号まで網羅すると莫大となり全てを紹介できないが、その一部を掲げておく。

#### 『和紙研究』発表論文一覧

和紙覚書	新村出
和紙覚書	新村出
和紙覚書 (三)	新村出
和紙覚書 (四)	新村出
和紙覚書 (五)	新村出
和紙覚書 (六)	新村出
杉原紙源流考 (上)	新村出
梶原紙筋記	堀部正二 新村出 (跋)
和紙の歌など	新村出
越後の小国紙	新村出
和紙自讃他讃	新村出
染紙紀談 (その一)	上村六郎
染紙紀談 (その二)	上村六郎
古染紙の化学的試験につきて	上村六郎
染紙紀談 (その三)	上村六郎
染紙紀談 (その四)	上村六郎
染紙紀談 (その五)	上村六郎

「紅梅の紙」につきて	上村六郎
因州青谷の三桮紙	上村六郎
染紙紀談（その六）	上村六郎
祭と染色（宣命紙について）	上村六郎
名塩の染紙	上村六郎
山の紙漉村を訪ねて [拙註：越中五箇山行]	上村六郎
雪の紙漉村にて	上村六郎
支那古代の製紙原料 附「かぢ」と「かうぞ」について	上村六郎
和紙研究会の歴史（前編）	上村六郎
和紙研究会の歴史（後編） 附・第十六号の訂正	上村六郎
大沢学兄の御霊前に捧ぐ	上村六郎
吉野紙雑考	禿氏祐祥
腰張用の松葉紙	禿氏祐祥
漉返しの技術と実用	禿氏祐祥
紙衣考	禿氏祐祥
白子の紺形	禿氏祐祥
墨流し模様	禿氏祐祥
紙類の用途と製造法の変遷（上）	禿氏祐祥
七夕の行事と五色の紙	禿氏祐祥
和紙風土記を読む	禿氏祐祥
葉袋紙に就て	禿氏祐祥
新撰紙鑑の作者	禿氏祐祥
繪奉書と千代紙	禿氏祐祥
長麻紙に就て	禿氏祐祥
国産紙と輸入紙	禿氏祐祥
橘香果の紙譜	大澤忍
たむきの語原に就て	大澤忍
麻紙に就て	大澤忍
雁皮付斐	大澤忍

茶毘紙に関する研究（其一）	大澤忍
茶毘紙に関する研究	大澤忍
紙の薬	大澤忍
宣紙と禪に就いて	大澤忍
正倉院御物特別展観を拝観して	大澤忍
独逸に於ける紙史研究所	大澤忍
檀紙に就いて	大澤忍
書物の病害とローマの王立研究所	大澤忍
青竹編新撰紙鑑に就いて	大澤忍
百万塔陀羅尼に関する研究（其一）特にその用紙について	大澤忍
百万塔陀羅尼に関する研究（其二）異版について	大澤忍
百万塔陀羅尼に関する研究（其三）特に印刷用の墨について	大澤忍
弘法大師筆「灌頂曆名」の用紙について	大澤忍
ナイル上流のパピルス「パピルスの秘密」補遺(二)	大澤忍
ドイツ紙史研究所の現況	大澤忍
再び弘法大師御請来目録 上表草稿の用紙について	大澤忍
百万塔陀羅尼の研究（六）再び紙質について走査電子顕微鏡による	

大澤忍・谷村英紀・大山昭夫

越前五箇の御留紙等製造記録	牧野信之助
越前五箇の御留紙製造記録（承前）	牧野信之助
麻紙の復活と五箇の漉場を訪ねた畫家達	艸坪 [拙註：牧野信之助]
五箇製紙立地考	小葉田亮
名鹽産紙について	中山琇静
名塩紀行	壽岳文章
紀伊産紙考（上）	壽岳文章
紀伊産紙考（中）	壽岳文章
紀伊産紙考（下）	壽岳文章
『源氏物語』に見えてゐる紙	壽岳文章
『枕草子』に見えてゐる紙	壽岳文章

下京の地紙漉	壽岳文章
『宇津保物語』に見えてゐる紙	壽岳文章
杉原谷紀行	壽岳文章
『榮花物語』『御堂関白記』に見えてゐる紙	壽岳文章
日向の紙	壽岳文章
和紙の創制	壽岳文章
両丹紙漉村紀行抄	壽岳文章
小野晃嗣氏の早逝を悼む	壽岳文章
セレベスのファ	壽岳文章
西鶴と紙	壽岳文章
本邦製紙史料としての地誌	壽岳文章
和紙研究の回顧と展望	壽岳文章
わが紙友抄（一）	壽岳文章
大沢忍学兄の長逝を悼む	壽岳文章
ネリの化学 現在までの諸家の研究について	町田誠之
ネリに関する化学的考察	町田誠之
ノリウツギの名前を巡って	町田誠之
三椶再考 その斐紙とのつながり	町田誠之
ハワイのタバ・手すき紙シンポジウムに出席して	町田誠之
図書の形態と用紙の品種	田中敬
蔵紙の取引と京都への移入（上）猿と紙漉	寺尾宏二
蔵紙の取引と京都への移入（下）	寺尾宏二
島根県高津川上流地域に於ける和紙生産の歴史地理的考察（上）	吉野鉄雄
島根県高津川上流地域に於ける和紙生産の歴史地理的考察（下）	吉野鉄雄
平安朝なかごろの文の様式と料紙	吉川理吉
平安朝なかごろの文の様式と料紙（完）	吉川理吉
紙漉の歌	安部幽香志
支那製紙に関する記録	谷聴泉手記
中世に於ける和紙の贈答	魚澄惣五郎

美濃に於ける徳川幕府の御用紙

紙尽しの献立

東埔寨僧侶の紙漉き

徳川時代大垣領の製紙業

万国博覧会に出品した和紙

羽織仕立の紙衣

熊正文氏の「宋時代に於ける紙の特殊用途」

因州紙から真の日本の紙へ

第五回図書寮展覧会「紙と装潢」出陳本について

宝暦明和年代における国産紙生産販売の経過について

森蘇軒

宮尾しげを抄

角田素江

森義一

田中緑紅

飯田榮助

藪田嘉一郎

宇野東圃

大窪太郎

岸田日出男

〔特別寄稿〕環太平洋地域に拡がるタパ文化

〔特別寄稿〕西安郊外の古代紙を漉く紙郷

〔特別寄稿〕白蓮紙・福建宣紙手漉工程について

中国紙情往来

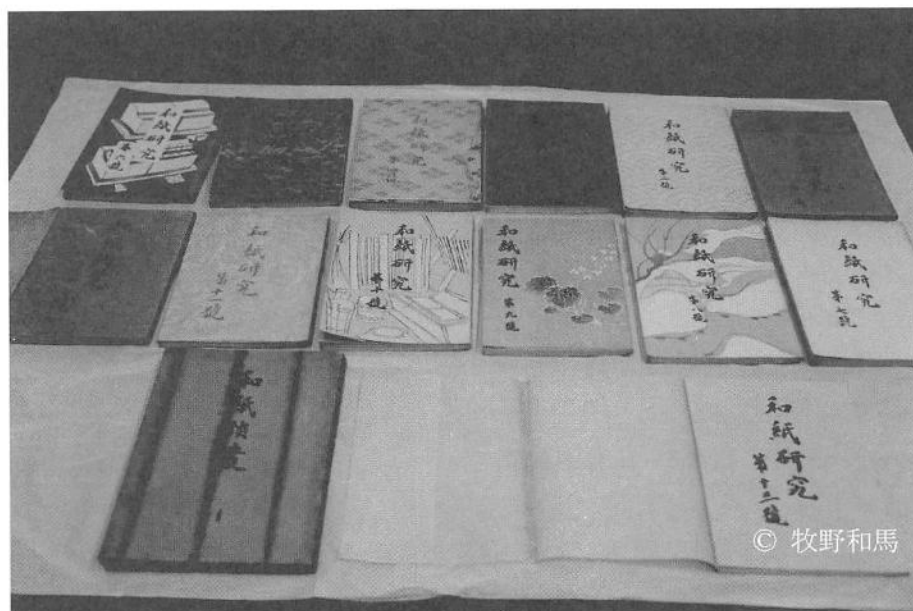
大沢忍同人の追悼

小林良生

久米康生

栗本四郎

『和紙研究』『和紙談叢』原文は旧字体



『和紙研究』『和紙談叢』（向日市文化資料館寄託資料）

【資料1】『和紙談叢』『和紙研究』編輯発行印刷所変遷

『和紙談叢 第一冊』  
昭和12(1937)年2月 年四回発行  
京都市伏見区桃山町羽栄長吉九番地  
印刷人 奥本正人 京都市伏見区瀬戸物町  
印刷所 創文社印刷工場  
京都市伏見区桃山町羽栄長吉九 奥本内  
発行人 和紙研究会  
京都市伏見区京町南八丁目 若林内  
発行所 澄心堂

『和紙研究 第一号』昭和14(1939)年1月  
京都市東山区林下町信重院内  
編輯兼発行人 和紙研究会 代表者 藤堂祐範  
京都市中京区新町通竹屋町南入  
印刷人 便利堂 佐藤濱次郎

『和紙研究 第二号』昭和14(1939)年4月  
『和紙研究 第三号』昭和14(1939)年8月  
『和紙研究 第四号』昭和14(1939)年12月  
『和紙研究 第五号』昭和15(1940)年4月  
『和紙研究 第六号』昭和15(1940)年7月  
『和紙研究 第七号』昭和15(1940)年11月  
『和紙研究 第八号』昭和16(1941)年3月  
『和紙研究 第九号』昭和16(1941)年9月  
『和紙研究 第十号』昭和17(1942)年3月  
『和紙研究 第十一号』昭和18(1943)年6月  
京都市東山区林下町信重院内  
編輯兼発行人 和紙研究会 代表者 藤堂祐範  
京都市中京区新町通竹屋町南入  
印刷人 株式会社便利堂 代表者 佐藤濱次郎

『和紙研究 第十二号』昭和20(1945)年1月  
京都市上京区上長者町烏丸西入  
編輯兼発行人 和紙研究会 代表者 藤堂祐範  
京都市中京区新町通竹屋町下ル  
印刷者 株式会社便利堂 代表者 佐藤濱次郎

『和紙研究 第十三号』昭和23(1948)年9月  
京都市上京区上長者町烏丸西入  
編輯兼発行人 和紙研究会 代表者 上村六郎  
京都市中京区新町通竹屋町下ル  
印刷者 株式会社便利堂 代表者 佐藤濱次郎

『和紙研究 第十四号』昭和26(1951)年1月  
京都市上京区烏丸通上長者町角  
編輯兼発行人 和紙研究会 代表者 上村六郎  
京都市下京区上烏羽村山町一〇三  
活版印刷者 有限会社 文功社印刷所  
京都市中京区新町通竹屋町南  
図版印刷者 株式会社 便利堂

『和紙研究 第十五号』昭和26(1951)年12月  
京都市上京区烏丸通上長者町角  
編輯兼発行人 和紙研究会 代表者 上村六郎  
京都市上京区室町通一條上ル  
製作者 綜藝舎  
京都市下京区上烏羽学校前  
活版印刷者 有限会社 文功社印刷所

『和紙研究 第十六号』昭和54(1979)年12月  
京都市下京区東洞院仏光寺上ル(株)森田和紙内  
編集兼発行人 和紙研究会  
事務局長 森田康敬  
京都市山科区四ノ宮 一燈園内  
印刷者 燈影舎 代表者 三上皓史

『和紙研究 第十七号』昭和59(1984)年11月  
京都市下京区東洞院仏光寺上ル(株)森田和紙内  
編集兼発行人 和紙研究会  
事務局長 森田康敬  
京都市山科区四ノ宮 一燈園内  
印刷者 (株)燈影舎 代表者 三上皓史

【資料2】『和紙研究第一号』昭和14(1939)年1月発行時同人及び関係者

新村 出 63歳	寿岳文章 1900-1992
藤堂 祐範 63歳	1924年京都帝国大学文学部選科入学、
禿氏 祐祥 60歳	1927年修了
牧野 信之助 55歳	
上村 六郎 45歳	中村 直勝 1890-1976
大澤 忍 40歳	京都帝大文科大学史学科卒大正9年三高教授、
寿岳 文章 39歳	昭和11年京都帝大助教授兼任
中村 直勝 49歳	
町田 誠之 26歳	町田誠之 1913-2017
奥本 正人 不明	1939年京都帝大理学部化学科卒40年京都工芸
若林 正治 27歳	教授、1947年京都工芸繊維大学教授、
佐藤 浜次郎 45歳	1988年日本・紙アカデミーの発起人会長
藪田 嘉一郎 34歳	
	奥本正人 不明
新村出 1876-1967	1937年「和紙談叢」編輯、『縮写 美濃紙抄製
1907年京都帝国大学助教授、帰朝後に同教授	図説 全』編輯
藤堂祐範 1876-1945	若林正治 1912-1984
1918年京都帝国大学図書館司書となる	昭和10年三高理科(甲)を卒業するが、経済
	的事情により大学に進学せず家業を手伝いなが
	ら古書収集を続ける
禿氏祐祥 1879-1960	
明治-昭和時代の仏教学者、浄土真宗本願寺派	
の僧、高輪仏教大(現竜谷大)卒	佐藤浜次郎 1894-1950
	1919年『法隆寺壁畫集』原色撮影、1927年技
牧野信之助 1884-1939	師長として便利堂入社、1929年『仏畫篇』撮
京都帝大 国史研究室に勤務、	影、1935年法隆寺金堂壁画3回目の撮影、和
同大史学科選科卒	紙研究第1号から13号まで印刷人として参加
上村六郎 1894-1991	藪田 嘉一郎 1905-1976
京都帝国大学工学部工業化学科卒、	1925年京都帝国大学文学部史学科選科入学、
同大助手	1928年同大学中退、1934年株式会社便利堂に
	入社、1950年同社取締役役に就任、1951年退
大澤 忍 1899-1982	社、同年、自ら綜芸舎を創立する
千葉医科大学卒業後、京都帝国大学清野微生物	
研究室に入る	



(参考)『和紙研究』『和紙談叢』所蔵一覧

データベース《CiNii Books 大学図書館の本をさがす》<https://ci.nii.ac.jp/books/> による

- ケンブリッジ大学図書館 1-15 談叢  
愛知学院大学図書館 1-11  
跡見学園女子大学新座図書館 1-17  
愛媛大学図書館 8, 15-17  
大阪教育大学附属図書館 1-3, 12  
大阪樟蔭女子大学 図書館 1-17 談叢  
大阪大学附属図書館総合図書館 1-15  
大阪府立中央図書館 1-13, 16-17  
大谷大学 図書館 1-12, 16-17 談叢  
金沢美術工芸大学 附属図書館 1-17  
紙の博物館 図書室書庫 1-17 談叢  
関西大学 図書館 1-17  
関西学院大学 図書館 1-17  
九州大学中央図書館 談叢  
京都女子大学図書館雑誌室  
1-12, 16-17  
京都大学吉田南総合図書館 1-17  
京都大学文学研究科 図書館 1-9  
京都大学附属図書館 1-8, 15 談叢  
京都大学人文科学研究所図書室 1-13  
京都大学法学部図書室 談叢  
岐阜大学図書館 1-9  
皇學館大学附属図書館 1-15  
高知大学学術情報基盤図書館 16-17  
甲南大学図書館 14-15  
神戸女子大学図書館 1-17  
国学院大学図書館 1-14  
国立教育政策研究所教育図書館 1-6  
国立歴史民俗博物館図書室 談叢  
駒澤大学図書館 1-17  
聖徳大学川並弘昭記念図書館 2-17  
重山文庫 1-17 談叢  
鶴見大学 図書館 1-17  
天理大学附属天理図書館本館 1-15 談叢  
東海大付属図書館 1-17  
東京芸術大学附属図書館 1-15  
東京国立博物館 1-11  
東京大学 史料編纂所図書室 1-15 談叢  
東北大学 附属図書館本館 1-10  
東洋大学 附属図書館 1-15  
同志社大学 図書館 1-13, 16  
独立行政法人 国立印刷局 1-8  
名古屋大学 附属図書館 談叢  
人間文化研究機構 国文学研究資料館  
1-4, 8, 10  
新潟大学 附属図書館 談叢  
花園大学情報センター 8, 15-17  
佛教大学 附属図書館 1-10, 16-17 談叢  
宮城県図書館 4, 7-13  
武蔵野大学武蔵野図書館 談叢  
武蔵野美術大学 12-13, 16-17  
明治大学 図書館 1-4, 9-11, 16-17  
山口大学 図書館 総合図書館 1-4  
横浜国立大学 附属図書館 1-15  
龍谷大学 大宮図書館 16-17 談叢  
ロンドン大学 SOAS 図書館 1-11

(以上、執筆時現在)